



デジタル高画質で観る

利根町 **大** 絵馬展

「あいさつ」

絵馬デジタル化ボランティアの方々、利根町内の神社仏閣の関係者の方々のご協力のもと町内に残る絵馬六十五点の写真撮影を行いました。その成果の一部を昨年の三月に「デジタルで観る利根町ミニ絵馬展」として皆さまにご覧いただきました。今回はプレ展示ということで、小規模な企画展ではございましたが、町内外の皆様から「利根町にもこんなに美しい絵馬があったのか」「近所に住んでいたのにこのような絵馬があることを知らなかった」「他の絵馬も見てみたい」などの多くの声をいただきました。

今回の絵馬展は、前回より展示数を増やすだけでなく、デジタル写真のサイズを大きくし、細部を一目で鑑賞いただけるよう部分拡大をした写真を増やしました。絵馬の描かれた当時の人々の思いや願い、そして時代背景などに少しでも迫るよう、秘められた人々の思いが伝わってくるようです。

多くの方々にご鑑賞いただき、本町の文化の一端に触れて頂ければ幸いです。

利根町教育委員会 教育長 海老澤 勤

はじめに

利根町内にある絵馬の多くが、江戸時代から明治時代に奉納されたもので絵具の剥離や汚れ等があるのが現状です。今後さらに劣化が進み、将来修復する必要があるため、色調や描かれている場面の様子等が残っている時に、できるだけ解像度が高い状態でデジタルデータ化しておくことが大切です。

また、現物の絵馬を移動させたりすると湿度・温度等環境が変わり損傷が急激に進むため、現在保存してある場所からの移動は難しくなり、ますます人の目に触れる機会が少なくなります。しかしデジタルデータ化することにより、絵馬所有の神社仏閣で行事等を行う際に、現物を移動しなくてもそれを印刷などすれば様々な活用に気軽に利用できます。そのためにもデジタルデータ化が有効になってきます。

それぞれの場所に保管してある六十五点の絵馬をデジタル化し、そこに描かれている図を、スタッフ・ボランティアの方々なりに解釈・研究をし始めて約二年が経ちました。その成果を企画展にご来場いただいた方々の見ていただき、皆さまのご意見等をご教示いただければ幸いです。

絵馬の意義

「絵馬」という言葉は、『本朝文粹』によると、寛弘九年（一〇一一）に大江匡衡（おおえのまさひら公卿、儒学者、歌人）が北野天満宮に奉納した品々の目録中「色紙絵馬三疋」とあるのが初見であるといわれ（※①）ています。

また元禄十二年（一六九九）の序がある『（一）神（※②）道名目良類聚抄』に「絵馬 造馬モ及サルモノ馬ヲ畫テ奉ルナリ 今世俗馬ニアラデ種々ノ繪ヲ図シテ 献上事ニナリヌ」と記載されています。さらに江戸時代中期の享保年間に作成された『今（※③）様職人尽百人一首』には「絵馬師 かくとだに絵馬は神社の捧げもの 所願を結ぶ施主の思いを」と記述されています。

利根町にゆかりのある柳田國男が自著『板（※④）絵沿革』の中で「人が心の中の思いを力強くする為に、之を絵にして永く残る形にして置こうとする事は、独り絵馬だけでなく、絵というものの全般の起源であったかも知れぬ」と述べています。さらに「言葉はまだ我々の心の中のものを、同じ強さではつきりと言いあらわすことができない。人に効果が無いことは神様にもまた届かぬかも知れぬ。それを補充し又は代表するものが古い世から行われた絵馬では無かつたらうか。」とも述べています。絵馬は奉納した人の心の中の湧き出る願い事を、言葉でそのままはつきりと言い表せないのです、それを補うために絵で表現し、神仏に届くように奉納したもので、自分（自分たち）の心の願い・思いを伝えるのが本来の目的なのでしょう。

そのような視点から町内の絵馬を観ると、松（・）が描かれた御社殿の前で手を合わせ何かを待つ

（・・）様子の絵馬もありますし、染物の作業を描いている絵馬や、御社殿の前の川をさかのぼる米俵らしき物資を沢山積んだ高瀬船を描いている絵馬もあります。さらに裕福な商家が家業繁栄等を願い奉納したり、「伊勢講」など講の仲間が共同で出資し、専門の絵師に大きい絵馬を描いてもらい、大願成就等の祈願とともに参拝記念に奉納している絵馬もあります。

以上のことを念頭に置きつつ、現在の私たちが絵馬を見る意義は主として次のようなことが言えるのではないのでしょうか。

（一）文献資料に制約があったり、聞き取り調査をしてもわからない過去の時代の様子が描かれていたりして、それらを裏付ける事柄や補充する事柄が視覚的に表現されている。

（二）美術的に価値がある。特に修行を積んだ絵師の作品は私たちに感動を与えてくれる。

（三）人々が人生で出会うさまざまな悩みや望みについて、祈り・願い、御礼を絵に託して神仏に示す様子が描かれており、奉納当時の生活の様子を垣間見ることがができる。

（四）人としての思いや願いを、時間を超えて共感したりすることが出来る。

このような観点から改め絵馬を観ると、当時の人々が私たちに語りかけてくるもの（・・）や、生活の様子等を感じとることが出来るでしょう。

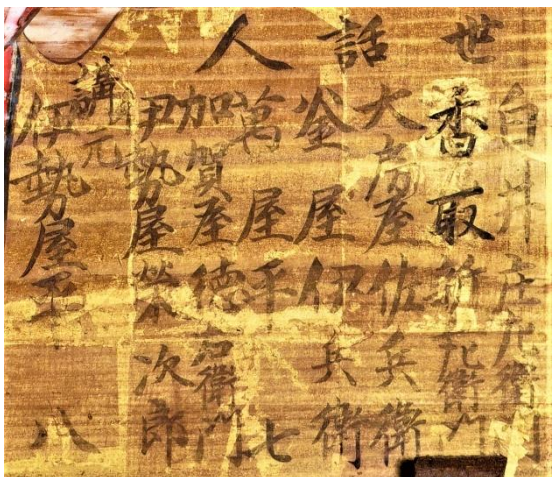
能楽石橋絵馬 春川画 制作年未詳 布川神社蔵

絵馬の上段に「伊勢年参講中」と書かれている。「伊勢」とは伊勢神宮を指しており、「年参講」は年一回の参拝を行う講(集会)である。

描かれている場面は「石橋」と呼ばれる能の作品の場面であると思われる。石橋は能の中でも代表的で、非常にめでたいものであり、絵馬からもその優雅さや躍動感が感じられる。

背景には金箔が貼られ、踊り手が足を前に踏み出そうとする一瞬の動きが描かれている。

制作・奉納年代は江戸時代末期頃と推測される。



- | | |
|---|---------|
| 世 | 白井庄左衛門 |
| 話 | 香取新右衛門 |
| 人 | 大房屋佐兵衛 |
| | 釜屋伊兵衛 |
| | 萬屋平 七 |
| | 加賀屋徳右衛門 |
| | 伊勢屋榮次郎 |
| | 講元 |
| | 伊勢屋平 八 |



宇治川先陣争い絵馬 (町指定文化財) 春川画 慶応元年丑仲冬 (1865年11月) 布川神社蔵

奉納者：杉野六兵衛 白井庄左衛門 江戸龜島町 和田屋三右工門 守谷町 斎藤徳兵衛 世話人：杉野平八

寿永3年(1184)1月20日に木曾義仲と源義経が宇治川で相対した時、義経方の梶原景季・佐々木高綱が源頼朝から与えられた、名馬である磨墨・生唆で先陣を争った故事を基に描かれた絵馬である。(左側が梶原景季と磨墨、右側が佐々木高綱と生唆である。) 激流渦巻き、水しぶきが飛ぶ宇治川の流れの中、腹帯を直す景季の動きに合わせ顔を上げる磨墨と、一歩前に追い抜く高綱と前のめりになる生唆の動きを、背景の金箔が躍動感を引き出して描いている。



張良吹笙繪馬 春川画 制作年未詳 布川神社蔵

江戸龜島町 和田屋三右衛門 世話人：伊勢屋平八 白井庄左衛門 伊勢屋庄右エ門 草川仁右エ門

秦末期～前漢初期の政治家・軍師であった張良が、^{ちょうりょう}鶏鳴山（^{けいめいざん}河北省）に上り、項羽の陣に向け「^{しょう}笙」という楽器を吹き、楚の曲を奏でている。これは「^{がいが}垓下の戦い」と呼ばれる戦的一幕であり、故事である四面楚歌の元となっているとも言われている。

制作・奉納年代は江戸時代末期頃と推測される。



天の岩戸絵馬（町指定文化財） 玉峨筆 慶応元紀乙丑五月吉日（1865年5月） 布川神社蔵

日本神話の中でも有名な、天照大神^{アマテラスオオミカミ}の岩戸隠れの場面を描いている。女性の神として知られる天照大神だが、この絵馬ではひげを生やし、男神として描かれている。左側には猿田彦大神、その足元には太陽を呼び出す常世長鳴鳥^{とこよのながなきどり}（鶏）が描かれている。右側には神楽達による演奏、その奥には天手力雄神^{アメノチカラオノカミ}が、足を踏ん張りながら岩戸を開けようとしている場面も描かれている。

神功皇后と武内宿祢絵馬（町指定文化財）

玉峨筆

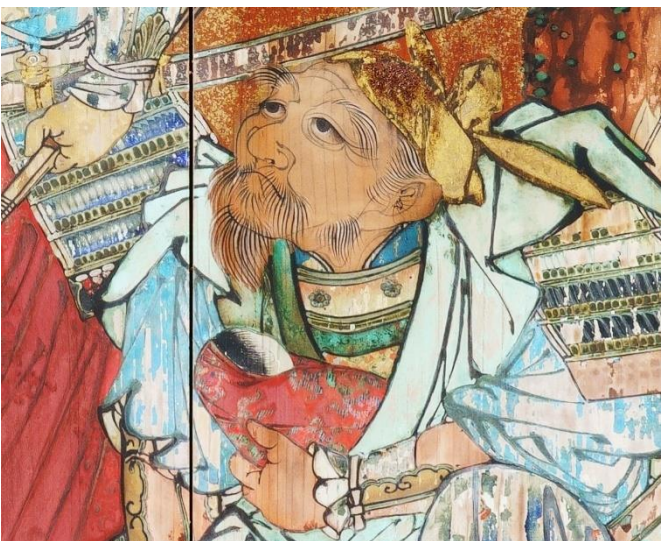
布川神社蔵

左側に神功皇后、右側に赤ん坊（後の応神天皇）を抱えて膝を立てている武内宿祢がそれぞれ描かれている絵馬である。

慶応元年（1865）5月の節句に奉納されているが、この構図や題材となっている絵は他にも存在し、江戸

の浮世絵師・歌川国貞が描いたものが存在する。

武内宿祢が赤ん坊を抱いて、神功皇后を見上げている。





八岐大蛇退治絵馬 玉峨筆 布川神社蔵

日本神話で出てくる、伝説の生物である八岐大蛇(ヤマタノオロチ)の伝承では、名前の通り頭と尾がそれぞれ8つあることで知られている。

この絵馬はクシナダヒメを守るスサノオノミコトが大きく描かれているが、八岐大蛇はなぜか1匹しか描かれていない。古事記等の記載とは別に描かれている。戦いの最中を描いたものか、作者の都合なのか定かではない。



鶴・孔雀絵馬 布川神社蔵

鶴が2羽、孔雀が1羽、そして背景に松が描かれているシンプルな絵馬であるが、実は非常に縁起の良い絵馬であることがわかる。

「鶴は千年」という言い伝えにもあるとおり長寿の象徴として奉られる他、一度結ばれると夫婦として一生を共にする鳥であるといわれ、結婚式の品物にもよく重用される。

孔雀は子孫繁栄の意味を持つ鳥や邪気を払うと言われている鳥であり、松も邪気を払うと信仰されている。



布川河岸絵馬（町指定文化財） 金刀比羅神社蔵

現在の利根町役場の周りから、金刀比羅神社・徳満寺にかけて、江戸時代末期の利根川と布川（当時は布川村）の繁栄を描いている。たくさんの船が行き交う中、陸地には金刀比羅神社、さらに遠くには筑波山が描かれており、現在にも通じる描写も多いことが特徴である。

船から荷物や人を運んで積み下ろしをする場所を、「河岸」といい、江戸時代末期の布川村には河岸が6か所もあったという。また積み下ろしに使う河川を走らせる船を「高瀬船」といい、当時は高瀬船が60艘ほどあったという。



水難救助絵馬 金刀比羅神社蔵

同神社に奉納されている杉野嵩雲絵馬と同じテーマで描かれているが、異なる描写として、杉野嵩雲絵馬は天狗が描かれていたのに対し、本絵馬は羽団扇が描かれている。団扇の骨組みがはっきりと確認でき、うっすらと骨組みより 筋が見える。

溺れかけている子どもに対して羽団扇より光線のようなものが注がれ、救助を促している様が見て取れる。



杉野嵩雲絵馬（町指定文化財） 嘉永3年（1850）8月奉納 金刀比羅神社蔵

白装束に身を固め、羽（葉）団扇を手に持ち、刀を背負った武者のような姿をした「天狗」が、川で溺れている子どもを助けようとしている様子を描いている。

インドを流れるガンジス川の水神「クンピーラ」が金毘羅（こんびら）の語源の元となっていることや、奉納された金刀比羅神社が利根川沿いにあったことから、水難事故がなくなるように祈りを込めて描かれ奉納されたものだろう。



搾油絵馬（町指定文化財） 文政13年（1830）冬奉納 金刀比羅神社蔵

絵馬の左下に「油職人中」と書かれているとおり、搾油の作業過程を絵馬いっぱいに表示している。絵馬が奉納された文政の時代は夜間の灯火用品として油が重宝され、関東を中心とした菜種栽培の普及とその絞油業の立ち上げを積極的に行うよう促した。文政9年（1826）には、江戸で一時的な油切れによる大騒動が起こったこともあり、いかに大事業として促進されていたかがわかる。



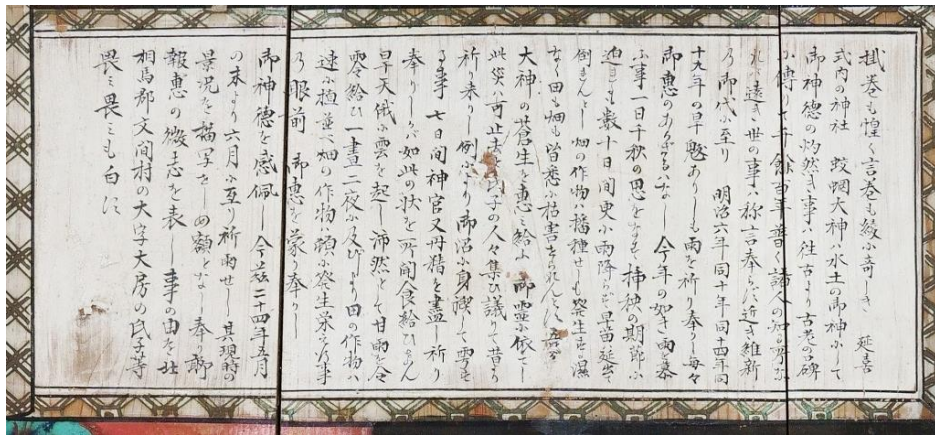
神功皇后と竹ノ内宿禰絵馬 藤原雲蜂画 天保12年(1841)3月上旬奉納 蛟蝸神社 奥の宮蔵

布川神社に奉納されている「神功皇后と武内宿禰絵馬」と題材が同じであるが、奉納年はこちらが布川神社の絵馬より20年以上前であり、作者も異なる。服飾や背景に差はあるものの、構図はほとんど同じである。しかし決定的に描写が異なるのは、竹ノ内(武内)宿禰の顔が、赤ん坊の方を向いているということ。目線だけでなく、頭も赤ん坊の方向を向いている。



雨乞い祈願絵馬 明治6年（1873）6月奉納 蛟蛸神社 奥の宮蔵

相馬郡下ヶ戸村（現・千葉県我孫子市下ヶ戸）の人々が奉納した、雨乞いをする情景を描いた絵馬である。下ヶ戸村から蛟蛸神社のある立木村（現・利根町立木）までは直線距離でも10km以上離れているが、蛟蛸神社は水神を祀る場所として古来より全国に知れ渡っているため、近隣より訪れる人も珍しくない。

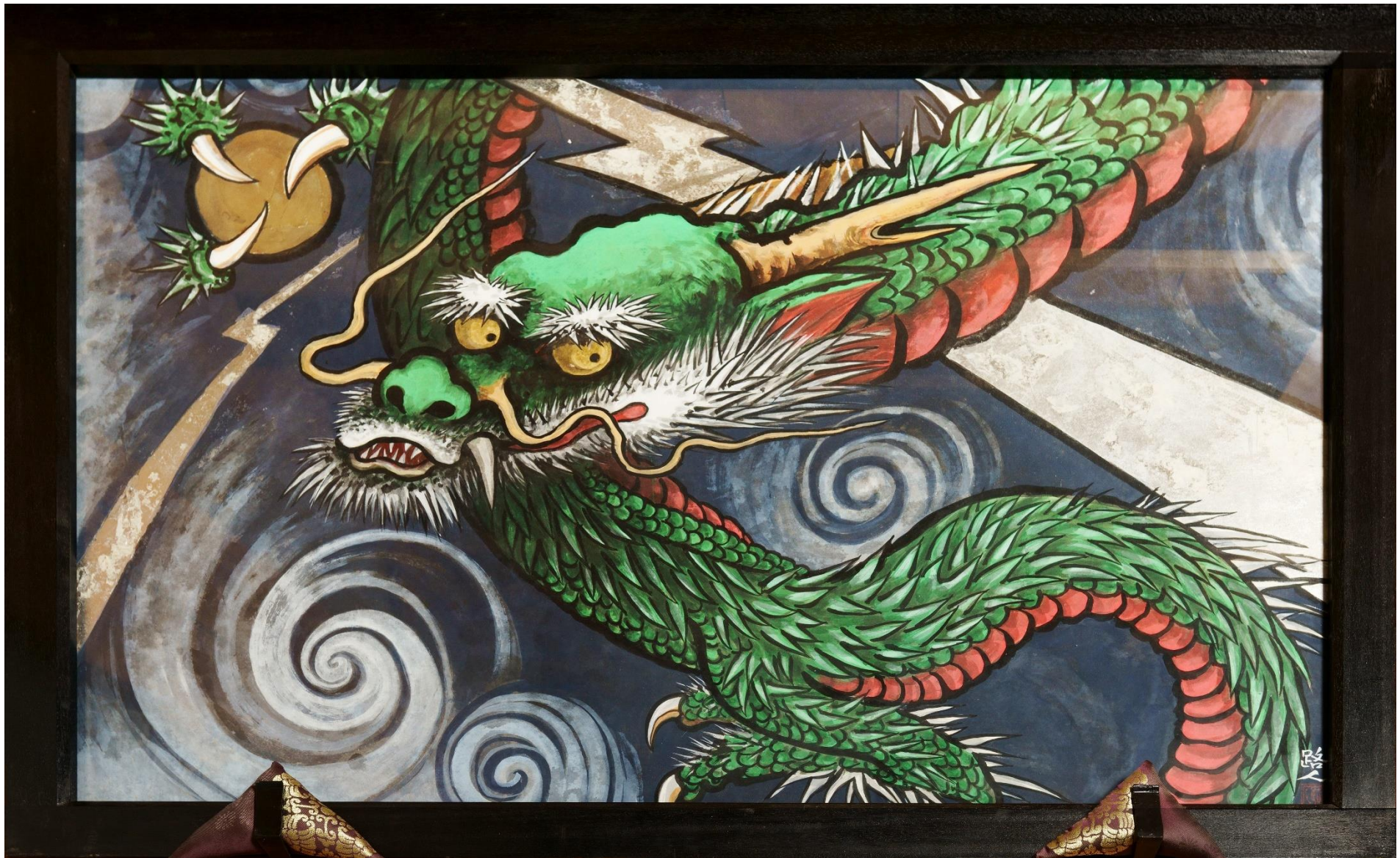


雨乞い絵馬（町指定文化財） 明治二十四年七月廿日（1891年7月20日）奉納
蛟蛸神社 奥の宮蔵

蛟蛸神社の「蛟蛸」は“みつち”という読み方があり、すなわち水龍=雨の神を表している。奉納当時は雨が降らずに日照りによる干ばつが続き、田んぼや畑の作物が育たない状態だったが、雨乞いをし、ようやく雨が降ったことで地元の人々はたいへん喜んだ。この絵馬は、その時のことを感謝して奉納されたものである。

蛟蛸神社に向かって雨乞いに行く人々を表しているが、小さくてシンプルながらも、動きや表情が非常に豊かに描かれている。青い着物を着て杖をついている人物がいるなど、年配の人でも雨乞いに参加している様子も伺える。

掛巻も煌く言巻も綾に奇しき 延喜
式内の神社 蛟蛸大神は水土の御神にして
御神徳の灼然き事は往古より古老の口碑
に傳りて千餘百年普く諸人の知る所な
れば遠き世の事は称言奉らず近き維新
の御代に至り 明治六年同十年同十四年同
十九年の旱魃ありしも雨を祈り奉りし毎々
思恵のあらざるはなし今年の如き雨を慕
ふ事一日千秋の思をなす挿秧の季節に
迫りても數十日間更に雨降らず早苗は延出
倒れんとし畑の作物は播種せしも発生する湿
なく田も皆悉に枯害せられんとす □ □
大神の蒼生を給ふ御靈に依てし
此災は可止去と氏子の人々集い議りて昔より
祈り来たりし例により御沼に身褻して雩す
る事七日間神官又丹精を盡し祈り
奉りしかば如此の状を所聞食給ひけん
早天俄に雲を起し沛然として甘雨を令
零給ひ一晝二夜に及びしより田の作物は
に植並べの作物は頓に發生榮え行事
の眼前 思恵を蒙り奉りし
御神徳を感佈し今茲二十四年五月
の末より六月に互り祈雨せし其現時の
景況を描写せしめ額となし奉り聊
報恵の微志を表し事の由を北
相馬郡文間村の大字大房の氏子等
畏み畏み曰す



龍絵馬 田中路人画 昭和41年（1966）制作 蛟蛭神社 奥の宮蔵

蛟蛭神社の主祭神である罔象女命^{ミツハノメノカミ}は日本の代表的な水の神であり、民間信仰においては龍や蛇の姿をしている。本絵馬は、他作品と比べて制作年代が比較的新しいこともあり、画風、色合い共にしっかりと現在まで残っている。



繫馬絵馬 正徳元年（1711）奉納 蛟蛸神社 門の宮蔵

絵馬としては、杭に繋がれた馬が描かれているという一般的な題材であるが、利根町で現存している絵馬の中ではもっとも最古とされている絵馬である。この絵馬の大きな特徴は、皮肉にもほとんど消えてしまっているということである。

この絵馬の云い伝えとして、「絵馬の馬が夜中に抜け出し、田の稲を食い荒らすので絵馬に手綱を書き足してもらい、馬を杭に縛り付けてからは平和が戻った。しかし、餌桶を書き忘れたため、馬が弱って色褪せてしまった。」という伝承がある。

画の特徴から、狩野派の絵師である狩野元信かのうもととのぶが描いたものと言われているが、詳細は不明である。



桃園結義絵馬 蛟蜋神社 門の宮蔵

有名な『三国志演義』的一幕である、張飛・劉備・関羽の3人が、桃園にて義兄弟の契りを交わす「桃園結義」の場面を描いた絵馬である。



間引絵馬（町指定文化財） 徳満寺蔵

利根町内の数ある絵馬の中で、もっとも凄惨を極めた絵であり、間引き(=子殺し)を表現した絵馬ということ以外、奉納した年、作者、どのような経緯で徳満寺に奉納されたのか、すべては想像にゆだねられている。

民俗学の父・柳田國男[明治8年(1875)~昭和37年(1962)]が、少年時代に大きな影響を受けた絵馬としても有名である。

女性が産んだばかりの子どもを殺している様子は鬼気迫るものを感じるが、障子に映る女性の影の頭には、まさに鬼の角のようなものが描写されている。



紺屋絵馬 相馬郡□□□□衛門奉納 来見寺道了堂蔵

「紺屋(こうや)」とは藍染屋のことをさしており、藍染めの作業風景を表した絵馬である。右側の作業小屋においては、藍の発酵をしている様、白い生地を藍甕で吊り染めしようとしている様、藍液に浸けた糸を力いっぱい絞っている様を確認できる。手前側においては、元来染めにくい藍を染めやすくするために呉汁(大豆のしぼり汁)を塗り込む作業や、洗い上げた生地を干す作業が見て取れる。奉納された明治期には、藍染という職が次第に減少していったため、忘れないように奉納されたものであろうか。



道了堂全景絵馬 口素口口川 口素画 明治9年（1876）奉納 来見寺道了堂蔵

金刀比羅神社所蔵の「布川河岸絵馬」と類似した景観の絵馬であるが、奉納年代から絵馬の色合いなど、多くの点で異なっている。

一番目につくのは、利根川を流れる高瀬舟の数であろう。布川河岸絵馬と比較すると、その数が減少していることが見て取れる。繁栄をしていた利根川・布川河岸の面影はなく、河岸付近にも人はほとんど見られない。当時の写真ではないため比較する術もないが、道了堂付近には多く人が集まり、多くの信者で賑わったことが推測される。



道了尊参拝絵馬 来見寺道了堂蔵

絵馬の剥離が激しく奉納年は不明である。門幕には天狗羽団扇紋を配して、桶型提灯に道了尊と書かれ、向かって右に母親らしき大人が、その横に子どもらしき人物が2人描かれている。建物の紋幕には、梅鉢紋らしき模様が描かれている。来見寺名物である「松替の梅」を象徴しているのだろうか。



牛若丸修行絵馬 早尾天神社蔵

安政6年(1859)に浮世絵師の歌川国綱によって描かれた『鞍馬山武術之圖』を模写して奉納された絵馬であると思われる。『鞍馬山武術之圖』は様々な画家によって模写され、本絵馬も差異はあるが、ほぼ同じ構図で模写されており、その完成度の高さが伺える。中央に若き日の源義経、別名「牛若丸」が鳥天狗と修行をしている様子が描かれている。軍記物語である『義経記』の登場人物であり、弓の名手である御厩喜三太、修行の様子を見守る大天狗の鞍馬山僧正坊が描かれている。



常盤御前絵馬 布川たこや画 早尾天神社蔵

平安末期に起こった平治の乱で平清盛に敗れた源頼朝の死後、追ってから逃れるために、常盤御前が子供である「今若」と「乙若」の手を取り道中を進んでいる様子が描かれている。よく確認しないと判別しづらいが、常盤御前の左手上に「牛若」が抱かれているのが確認できる。雪が積もった寒い道中、少しでも温めようとしている様が見て取れる。



女人祈願絵馬 (1) 左上 明治33年(1890)旧正月25日奉納
 女人祈願絵馬 (2) 左下
 女人祈願絵馬 (3) 右上
 早尾天神社蔵

早尾天神社には、同じ構図の祈願絵馬が他にも2点現存している。このような祈願をしているものは通称「拝み絵馬」と呼ばれ、描かれている人物も「男拝み」「女拝み」「子ども拝み」「男女拝み」「父子拝み」「母子拝み」などがある。右側の幕の画に描かれた文様は梅鉢である。

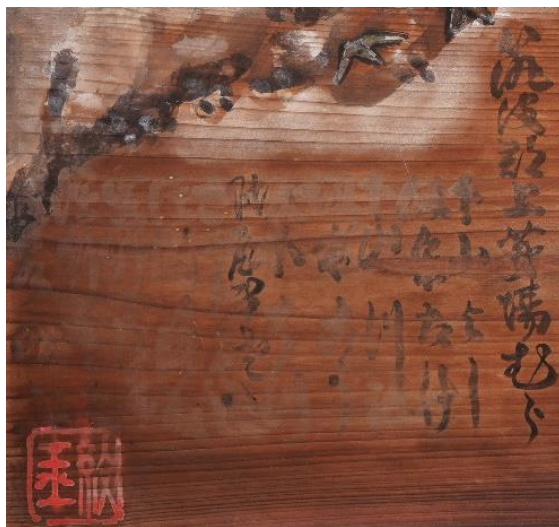
絵馬の(1)と(2)は奉納者が同一人物であり、若年期と老年期にそれぞれ描かれたものであるが、片時も祈願を忘れない信仰心の表れなのだろうか。



水神出し絵馬 作者不明 水神宮（押付本田）蔵

江戸時代の押付村には高瀬船が15艘近くあり、小堀河岸（取手）の依頼を受けて舂下船として活躍していた。

利根川には複数の船が描かれ、「出し」と呼ばれる上流側には石垣のようなものが積み上げられており、先端付近には杭が打たれて土は流出しないようになっている。



女人講絵馬 (1) 左下

女人講絵馬 (2) 明治19年1月奉納 諏訪神社蔵 右上

女人講は、伝統的な地域共同体を基盤とする既婚した女性によって構成され、そこで安産やより良い子育てを趣旨とする集まりが形成されている。

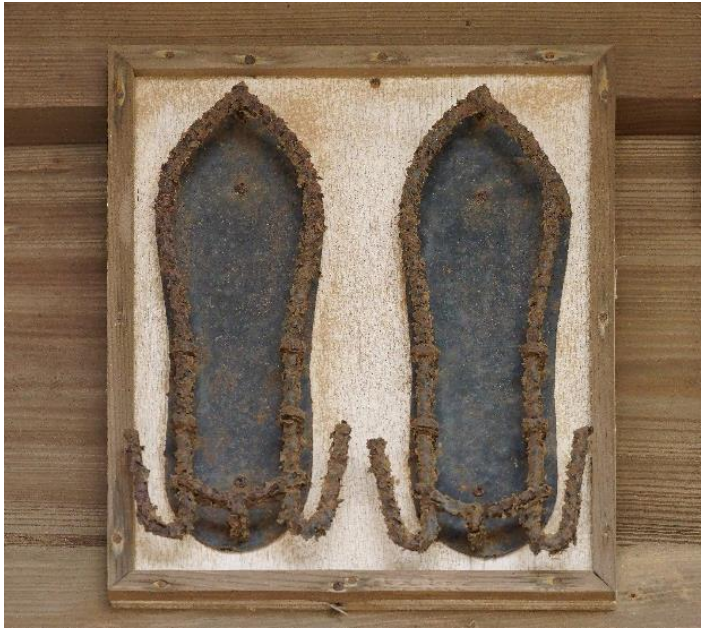
活動は日常生活からのつかの間の開放や、女性同士の連帯感を強め、伝統行事における意味を持っていた。

上段の絵馬は、筑波郡上萱場むら（現・取手市上萱場）と記載され、他地域からも奉納されていたことがわかる。神社の位置が遠く見える構図より、遠方から参拝していることを示していると推測される。



杉野東山篆額（町指定文化財）杉野東山筆 左上 泉見寺蔵
 烏天狗彫刻額 左下 泉見寺蔵
 杉野東山篆額 右上 杉野東山筆 金刀比羅神社蔵

これらは絵馬ではないが、布川の書家である杉野東山の篆額と、今なお存在感を際立たせている烏天狗が描かれた彫刻額は、町の数少ない歴史的な芸術作品として本図録に紹介させていただく。



飛天図(一) 左上
 飛天図(二) 右上
 奉納物(わらじ) 下段

絵馬目録

所蔵	名称	作者	奉納者・願主	奉納年	寸法cm (縦×横)	備考
布川神社	能楽石橋絵馬	春川	白井庄左衛門 他七名		九六×六〇	
	宇治川先陣争い絵馬	藤井春川	杉野六兵衛 他四名	慶応元年仲冬	九二・五×一五七・五	町指定
金刀比羅神社	張良吹笙絵馬	春川	和田屋三右衛門 他四名	慶応元年五月	八七×一六六・五	町指定
	天の岩戸絵馬	玉峨	氏子中	慶応二年三月	九〇×一五五	町指定
	八岐大蛇退治絵馬	玉峨	香取源右衛門 他十二名 鑑尾定吉 他七名	慶応元年五月	一〇〇×六〇・五	町指定
	鶴・孔雀絵馬	玉峨	玉村嘉代	安政六年六月	三八×六〇	町指定
蛟網神社奥の宮	布川河岸絵馬	太助	世話人 要七 源七 他百四十六名	天保十四年 八月十日	九一×一八一	町指定
	杉野嵩雲絵馬		伊勢屋嘉七		一一〇×一四七	町指定
	水難救助絵馬		油職人中	文政十三年冬	四〇×七〇	町指定
	搾油絵馬		油職人中	文政十三年冬	七四×一五三	町指定
徳満寺	杉野東山篆額	杉野東山	杉野東山		八二・五×一五二	
	神功皇后と竹ノ内宿禰絵馬	藤原雲峰	玉村玄瑞 他十四名	天保十二年三月	九九×一五五	
	雨乞い祈願絵馬		下ヶ戸村中	明治六年六月	八四・五×一七〇	
	雨乞い絵馬		文間村大房 氏子等	明治二十四年	一〇〇×一六四	町指定
来見寺	龍絵馬	田中路人		昭和四十一年		
	韓信股くぐり絵馬	古川高之助	木邨忠八 他十四名	文久二年四月	八〇×一六八	
	繫馬絵馬	伝狩野元信		伝正徳元年	一一三×一六二・五	
	桃園結義絵馬	藤原周忠		寛政三年	一〇三×一二二	町指定
早尾天神社	間引絵馬				八三・四×九九・五	
	紺屋絵馬			明治九年三月	九九・五×一四四・六	
	道了堂全景絵馬		油屋職人中 他	明治七年春	一〇五・五×一六六	
	道了尊参拝絵馬		下柳宿 金田氏		六六×九七	
水神宮	烏天狗彫刻額				七六×一四五	
	牛若丸修行絵馬	齊藤良郷	大房村 野口氏		六〇×九〇	
	常盤御前絵馬	布川たこや			三三・五×四八	
	女人祈願絵馬(一)		文村 坂本志ん	明治二十三年	三二・二×四五・三	
諏訪神社	女人祈願絵馬(二)		当宇 坂本志ん八十八歳		三二・二×五四・五	
	女人祈願絵馬(三)			明治三十八年	五五・三×七六	
	祈願絵馬(一)		石橋松太郎	明治三十四年	七七×九一	
	祈願絵馬(二)			明治三十八年	四三・五×五七	
泉光寺	水神出し絵馬				二七×三八・五	
	女人祈願絵馬(四)				三二×四五	
	女人講絵馬(一)		細田しか 他二十六名		八七×一一七	
	女人講絵馬(二)		筑波郡上萱場村山下よし 他九名	明治十九年 十一月	五五×八七	
泉光寺	杉野東山篆額	杉野東山	杉野東山	嘉永三年 十月三十日	九六×一八〇	
	飛天図(一)					
飛天図(一)						
飛天図(一)						

協力者一覧

本企画展の開催、図録の作成にあたり所蔵者の方々をはじめ、次の方々よりご協力をいただきました。記して謝意を表します。（順不同・敬称略）

町内神社仏閣

蛟蛸神社

布川神社

金刀比羅神社

諏訪神社

早尾天神社

押付本田水神宮

徳満寺

来見寺

泉光寺

絵馬デジタル化・絵馬展ボランティア

香取達彦

古田吉光

白井清司

二木祥子

中澤則明

高橋勝正

奈良浩伸

主な参考文献

- ・『利根町の絵馬』利根町教育委員会
- ・『絵馬はいつごろから始まったのか。現存最古の絵馬はどこにあるか。』
レファレンス共同データベース・愛知芸術文化センター提供 更新日時 平成二十七年三月二十九日
- ・『神道名目類聚抄』巻三 桜園書院 国立国会図書館デジタルコレクション
- ・『今様職人尽百人一首』米山堂 国立国会図書館デジタルコレクション
- ・『柳田國男集 定本 第二七巻』筑摩書房

発行

令和五年六月十二日

編集・発行

利根町教育委員会

表紙…布川河岸絵馬

裏表紙…雨乞い祈願絵馬

